

同十五年 第一産業(株)

同十八年一月 入隊

同二十四年九月二十四日 舞鶴上陸

同二十五年 鉄鋼業就職

同五十四年二月 全抑協若手県連結成に尽力

常任委員 釜石支部副支部長

(岩手県 田辺 壮久)

## 六割も死んだ地獄ラーゲル

石川県 松 田 春 雄

(旧姓 北村)

私は関東大震災の大正十二年、石川県松任市に生まれた。当時は出城村竹松浜という戸数七軒の集落で、本村の竹松から二キロも離れた海辺である。小学校から高等二年を卒えるまで八年間、四キロの田圃道を出城尋常高等小学校へ通いとおした。村からの同級生は男三人。今日も達者でいるのは、暇さえあれば砂浜で遊び回ったお陰であろう。

学校を出て時局柄、海軍へと志望していたが、先生に説得された父の奨めもあって、近くの県立松任農学校に入学した。

農学校では三分の一が実習で、味噌や醤油、筍の缶詰作りなど、私の青春時代で一番楽しい三年間であった。

いざ就職となつていろいろ迷つていたところ、松任出身で満鉄の撫順炭鉱に在勤中の宮本常次郎さんがたまたま帰省されて、農学校出身者を是非一名と学校に依頼があり、お鉢が私に回つてきた。『海外雄飛』が高唱されていた時代でもあり、先輩もいる満鉄ならと、私も決心してお世話になることになった。

昭和十五年三月二十日、満州国撫順炭鉱西製油工場に入社。徴兵前の青少年で青年隊が組織されており、全員青年塾に入寮という軍隊生活に準じた厳しいものであった。大東亜戦争開幕の朝は、塾の横の氷結した蓮池の上を一直線に走つて撫順神社に参拝、戦勝祈願をしたが、真っ青に澄んだ空が今でも臉に焼きついてゐる。

だんだん戦局も激しくなつて職場の空気も緊張する一方だったが、内地に比べればまだ物資も豊富だった。十八年、徴兵検査を受けることになった。前年までは帰国して受検し、合格すれば郷土の部隊に入隊することになっていたが、今回からは現地で行うと改められた。撫順市で検査を受けて甲種合格!! 寮へ帰ると寮母さんが赤飯を炊いて皆で祝ってくれた。

入隊前に一度帰国しておきたいと申請したが、全然不許可。それではと「母危篤」の電報を打ってもらい、やっと四年ぶりに郷里に帰る。ちょうど秋の实りで、一面黄金色の稲穂が波打っていた。入営の正月まではアツという間に過ぎた。

入営は間島省の琿春で、入隊する部隊は国境の春化という所であった。満州国、朝鮮、ソ連の接点で、山裾にある兵営から山に登ると、谷を隔てて向こうの山に、ソ連軍が鉄条網張りなど陣地構築に余念がなく、遠くにウラジオストックへ向かう軍艦も望見できた。

ここで厳しい初年兵教育を受け、終わると幹部候補生の試験があつて、甲種に合格できた。候補生の集合

教育で牡丹江へ行く。士官学校出の張切りボーイの教官、若林少尉にみっちり絞られる。年末の演習中、突然方面軍司令官山下奉文大将の閲兵があり、長時間、小銃を握って不動の姿勢でいたため、右手の食指と中指が凍傷になった。今でも冬になると時々冷たくなることがある。

昭和二十年の正月早々、今度は南滿遼陽の幹部候補生の教育隊へ。全滿から四千人の候補生が集合して、六カ月の仕上げの教育を受ける。六月、無事終了。左腕に適任章をつけて見習士官となり、将校服や軍刀、拳銃その他一式を入れた将校行李を支給される。いよいよ将校だと実感し、今までの血の出るような苦勞も吹き飛んだ。四千人のうち、二千名は南方へ、二千名は関東軍の各隊に配転されたが、南方組は沖繩行き待機の内を終戦になり、逸早く郷里へ帰ったとは後で聞いた話。

私は新編制ハイラル第一一九師団の新設の突撃大隊の小隊長要員として転属命令を受けた。部下になる兵隊はいずれ各部隊から来るが、今は興安嶺の山々に拠

点作りをしているとかで、顔も名前も分からない。

師团长塩沢中将の訓辞を受け、ハイラル（海拉爾）とチチハル（齊齊哈爾）の中間のブハト（博克図）に移って、同僚となる小隊長要員と、大連で下士官教育を受けたばかりの分隊長要員と初めて顔を合わせた。

大隊長は小野少佐、中隊長は山鹿中尉、小隊は六つで、第一が宮城少尉、以下の五つは見習士官ばかりで、私は第五小隊長を命じられた。

ソ連軍が侵攻してきたのは半月後、急遽命令が出て、各小隊は一カ月分の糧秣、弾薬を駅から一キロ離れた所で貨車積みせよ、ときた。その運搬途中、突然爆音がして頭上で爆弾が落下し出した。次に低空飛行で機銃掃射ときたので一同大慌て。貨車の下にもぐり込んだが、初めての経験であり、頭上から撃たれる恐さといったらなかった。

ハイラルとブハトの中間の無名駅に集合していた我が部下となる兵隊たちと対面、名簿を一見して初めて小隊を編制し、各員に一カ月分の食糧、弾薬を携行させ約四キロ、地図を頼りに山中の拠点まで行軍する。

陣地は山腹に横穴を掘り、板で二段の寝台六十名分を設け、入口は草木で偽装して蓋をしたものである。小隊間の距離は四、五キロほど離れていて、電話もなく全く孤立状態であった。

これからは六十名の兵と共に生死を賭けて任務を遂行するのみ。任務とは敵の後方攪乱で、敵の幕舎や輸送列車を攻撃せよということで、昼は寝て夜間に行動するのである。

拠点に入って半月ほど経ったある日、三、四人の子を背負ったり手を引いた日本の女性が、拠点を見つけて走り寄り、ハイラルから南方へ逃げるのだが、子供たちに何か食物をと懇願された。私たちも米はほとんど食べてしまって乾パンしかなく、いつまで続くか分からない状況で、碌に助けて上げることもできなかつたが、果たして日本に帰ることができたのだろうか、今も時に思い出すことがある。

我が小隊は隔日くらいに出撃を繰り返して戦った。大隊本部からは一言の連絡もなく、終戦になったことも知らずに八月三十日未明、ウノールという駅を攻撃

して交戦し、一名の戦死者を出して引き揚げた。朝の十時ごろ、朝食をしているときに、二名の伝令が来て、五、六小隊以外、大隊長以下全員が既に武装解除されてウノールの駅に收容されている、日本は八月十五日に降伏して戦争は終わった、早く山から出てこい、ということだった。私たちは半信半疑であったが、山を下りることにした。知らぬこととはいえ、昨夜の攻撃で一名を無駄死にさせたことは慚愧に堪えなかった。

半月ほど收容され、いよいよ一千名の大隊に編成されて貨車に詰め込まれる。だれもが予期した「東京ダモイ」の喜びは水泡と消え、西へ西へと送られる。

幾日くらい走ったであろうか。不安と諦めの繰り返しで、大隊長以下皆一緒だと安心もあったが、ある小さな駅で停車して、全員下車を命ぜられた。周囲を見回しても海らしいものは見えず、これから行軍だと言われて、やっと騙されていたことが分かった。

「ダワイ、ダワイ」「ピストラ、ピストラ」訳の分からない怒鳴り声に追いつてられて、どれだけ歩いたか。ある地点で四百名を残し、更に残り六百名が

数十キロも進んだようだ。ソ連領に入ってから收容所は「チタ地区(第二四地区)」のナルイムにある第四分所であった。シベリア鉄道本線の要地、チタから二百キロ余東南方の所である。

收容された所は、ソ連の重罪犯が流されていた監獄とかで、二重に張られた鉄条網の間に、尖端を尖らせた三メートルほどの松の丸太を隙間なく立てた柵があるという嚴重さで、隅の二カ所に立つ櫓には、監視の歩哨が自動短銃を持って昼夜の別なく見張っていた。

ソ連軍に抵抗して戦った日本の部隊には、報復的に冷酷な扱いをしたということを後になって聞いた。

入ソした十月はもう初冬で、日一口と寒くなっていたが、夏服の着の身着のまま来て部下たちは、寒さに震え上がり、冬服や防寒具をもらうまでは随分と苦労した。

身の回りの整理もそこそこに、早速作業に狩り出された。作業は、見渡す限り林立する松の伐採と運搬、トラックへの積載などで、私の小隊は運搬作業であった。

伐採する丸太は、根元から四メートル五〇、五メートル五〇、六メートル五〇の三種類になっており、直径は二〇センチくらいから五、六〇センチ以上もあるのがあった。シベリアの松は伸びが良くて二、三〇メートルがザラで、曲がったものは一本もなく、真っ直ぐに林立していて、枝は先の方に少ししかない。日本の竹を太く、高くしたものを想像してもらえばよい。

本格的な冬が到来すると、満州で体験した寒さなど問題にならない酷寒が訪れ、それに加えて、当初は余り文句も言わなかった「ノルマ」をやかましく要求されるようになり、食糧も空腹を満たすどころか、食べた直後も食べた気がしない量であった。

今まで見たこともない黒パン一片（コップ大）と羊肉とキャベツのスープ一杯。その羊も肉は全部そぎ取って、骨だけのものではあった。そのほか、関東軍の糧秣庫から洗いざらい略奪してきた高粱や粟など、精白しない、消化の悪いものばかりであった。米はソ連側と日本の将校連だけで食べていた。

シベリアでは、夏は日の出が午前二時ごろ、日の入

りが午後十一時ごろ、冬は午前十一時ごろと午後二時ごろであったが、作業はカッキリ八時間働かされた。零下五〇度以上の酷寒の日も一冬に三、四回あった。

作業は零下二五度以上になると一応中止とはなったが、酷寒、空腹、重労働と三拍子揃ってはたまったものではない。入ソした初の冬から翌年の六月までに、六百名のうちなんと三百五十余名が骨と皮ばかりの栄養失調で死んでいった。残った者も痩せ細って、全くこの世の地獄図絵であった。

私たちのナルイムには、医薬品といえば衛生兵が満州時代に使っていた残りをわずかに鞆に入れて持っていたもので、一度下痢をすると、消化の悪い食糧と冷えとで施しようがなく、死を待つばかり。ナルイムほど残酷無情なラーゲリはなかったのではないかと思っばかりである。

二十一年の夏までは軍隊組織のままだったが、どこからともなく民主運動なるものが入ってきた。それまで将校たちは食事は米飯、作業も監督だけであった。

私たち見習士官はソ連では下士官として扱われ、兵隊

と一緒に労働していた。民主運動が激化すると、真先に槍玉に上がったのは将校であったが、他所のような激しい「つるし上げ」はなかったが、反動分子としてどこかへ移された。

見習士官も一緒だったが、私だけは部下が極力庇ってくれて残された。

作業班が編成し直され、私も班長に推された。今度は伐採に代わって、ソ連の民間人の監督（マッセル）と二人で毎朝、前日伐り倒した丸太の石数を計算してノルマを出すことと、現場の作業監督をする仕事である。私たちのマッセルは二十一歳のターニャという娘であった。ソ連では男女平等で人種差別もなく、みな、同志であった。子供も「ヤポンスキー」と声をかけて集まって来て、何でも「ダイチャ、ダイチャ（頂戴、々々）」と言ってねだった。

それからは毎日、私は山へ行って作業の指示をした後、マッセルと二人で前日伐った丸太を一本一本寸法を計って√印をつけ、彼女がノートに記録する。合計してノルマを出すのだが、どうしても百パーセントど

ころか半分もできない。時々乗馬で視察に来る村長級の監督に、腹いっぱい食わせれば必ずやり遂げるからと何度も交渉したが、まずやって見せることだと取り上げてくれなかった。

ラーゲルの近くから伐り倒していくので作業場もだんだん遠くなり、疲労、衰弱も増していく。冬のある日、仕事の終わった帰り道、歩哨が、自分らの兵舎用の薪にする長さ五十センチほどの丸太を一本ずつ背負って帰れと強要した。疲れ切った体に無理難題、私を先頭に牛歩で歩いているところへ、所長（アダ名が赤鬼）が乗馬でやって来て、なぜ早く歩かぬかと詰問した。私の抗議を聞くと逆上して下馬、腰の拳銃を引き抜いて私の背中に突きつけて怒鳴り散らした。私は覚悟を決めて撃つなら撃てと開き直った。

赤鬼は業を煮やして帰っていったが、収容所に帰るや否や、営門の前の丸太小屋、営倉に放り込まれた。

黒パン一片と水、毛布は一枚で五日間。しかも昼間は皆と作業に出るのだからやり切れなかったが、夜中、床下からノックする音に板を剥がすと、暗闇から高粱

飯を盛った飯盒と毛布一枚がせり上がってきた。危険を冒しての部下たちの情に嬉し涙が止まらなかった。

幸い土地が砂地だったので、鉄条網の下から床下まで、モグラのように土をはねて忍び込んでくれたのである。

作業隊長の私としては、とにかく皆に腹いっぱい食べさせることが先決、それには何としてもノルマを上げることでと策略を練った。まずマツセルのターニャの歡心を買うことだと、ロシア女性が一番欲しがるネッカチーフ用にと、風呂敷や日の丸、兵隊が持っていた赤禪まで集めて、次々にプレゼントした。翌日、赤禪を被ってきたのは大笑いしたが、彼女の信用はどんどん増して、いよいよ本題の伐木の計測に際し、私は次々寸法を早口に言って、彼女が記入に手間取る間に、三本に一本は√印を付けずにおき、翌日の記帳のとき、「オヤ、記入洩れがある」と言って記録させた。

この「ゴマカシ」が功を奏して、月平均一二〇パーセントの成績を上げ、食糧も増して皆の生気が回復してきた。月一回、チタの本部から来る地区司令官が全員の前で訓辞するが、北村作業隊はハラシヨラポーター

(優秀作業隊)だと褒めてくれ、月に百から二百ルーブルの給料もくれるまでになった。優秀者は先に帰すという噂が流れていたもので、早く帰りたいの一心でもあった。ところが、実際は病弱者や役立たずを先に帰していたのであった。

チタ地区の民主運動も漸次活発になってきていた。将校の端くれの私は、いつ反動分子として吊し上げに遭うか分からないので、先手を打って運動にも積極的に参加し、壁新聞作りにも協力した。そのせいか、昭和二十二年の九月、アクチブ(活動家)としてチタへ一カ月の講習に派遣された。各地区から集まったアクチブの前に毎日、ソ連の歴史、マルクス・レーニン主義、唯物論やスターリンについての講義があった。ある日、日本共産党中央委員の袴田里見の弟が突然来場したが、将軍級の軍服に黒ピカの長靴をはいた威容?は「シベリア天皇」の名にふさわしいものだった。

収容所に帰ってから、以前の作業をしながら夕食後は民主主義などの講座を開講した。二十三年になると歩哨役も任されて、作業隊長・歩哨・講師と心にもな

い三役をつけられてしまったが、すべて皆と一日も早く帰国したい一心からであった。

このように、入ソ二年目後半以降は肉体的には楽だったが、精神的な苦表に安堵する日はなかった。二十三年の九月、いよいよ「ダモイ」の日が近づいた。手仕事で作った小物——ジュラルミンで作った煙草ケース、つつじの根を細工したパイプなど土産物にと荷物にしたが、厳重な検査で紙一枚まで没収され、後生大事に秘蔵していた死没者の名簿も取り上げられたのは残念至極であった。

来た道をまた長い行軍で駅まで出、ナホトカ目指して乗車したが、来たときは六百名がたった二百名そこそこ、帰る喜びよりも凍土に埋もれた戦友を思つて悲憤でいっばい、後ろ髪を引かれる思いであった。

ナホトカに着いて海を見たとき、海の向こうは日本だと望郷の念が込み上げてきた。

二日、三日と待ったが、迎への輸送船が来ない上に先客が満員だということで、再び汽車に乗せられて湾に近い小駅で降ろされた。そこで翌年の八月まで、製

材工場で働くことになるうとは。ノルマはなかったが、相変わらずの食糧不足にまいった。近くの湾は冬期結氷するので一キロほど沖へ出て、手製の糸と真鍮板をつけた擬似針で氷の穴釣りを始めると、アマサギに似た小魚が一時間ほどで五、六十尾も釣れた。味は日本の胡瓜のような味で、腹の足しになった。

製材の仕事は、直径五〇センチもある松材を角材に挽いてゴットン、ゴットン転ばして運ぶのだが、私はこの作業で左中指を詰め、生爪を剥がしてとんだ痛い目に遭った。今でも中指の爪が割れて出てくるのと、第一関節がくの字に曲がっている。

昭和二十四年八月、再びナホトカに戻り、強要された「スターリン感謝」の署名もお義理に済ませて、第一大拓丸に乗船した。白衣の看護婦さんがこんなに美しく見えたことはない。

八月十四日、ちょうどお盆に故郷の松任駅に着いた。兄と語り合いながら四キロの道、家で出迎えた両親は涙を流すばかりであった。

九月は農家で一番忙しい稲刈りや脱穀、労働に慣れ

た私は流れる汗を厭わなかった。

翌二十五年、縁あって松任市内の松田家に婿入りした。シベリアで培った労務関係の仕事で、信用組合その他二、三の会社に勤めたが、「人のために尽くせば、必ず自分に返ってくる」という信念をもってその間の人生を過ごし、昭和五十七年、会社勤めにピリオドを打って年金生活に入った。

同時に、シベリア抑留者のための全抑協の運動に参加して微力を尽くすことになり、松任支部の事務局長、次いで石川県支部の事務局長を仰せつかり、シベリアで死没した県出身者の同胞のために慰霊碑建立の事業にも参画してきた。

お陰をもって一昨春秋、慰霊碑の建立を見、その後毎年十月、慰霊祭を施行しているが、今も凍土に眠る戦友諸士の霊安かれと祈念する次第である。

### 【執筆者の紹介】

松田さんは、昭和十五年に満州国撫順炭鉱に入社、入宮も満州で、終戦の時はハイラルの山中で、隠密部

隊の小隊長として、終戦も知らずにソ連軍に抵抗していた。

そのせいか、チタから二百キロの山奥、昔、流刑地であったという僻地に懲罰的に送られて苦勞し、一冬で六百名のうち三百五十名が死亡したという生き地獄を体験した。

犠牲者の名簿も持って帰れず、部下の名も全く思い出せないのはいまだに心残りだと言う。一人でも多く生きて帰らねばと、作業隊長、歩哨、民主主義講師の二役を勤め、環境の向上に苦心した。いざ帰還の日がきても、凍土の下の戦友を顧みて本当に後ろ髪を引かれる思いであったという。

折角、少しでも日本に近いナホトカまで出てきたが、先客で満員ということで、また一年、日本海の見える小村の製材工場で働かされた。作業で左手の中指を詰めてしまい、今も第一関節がくの字に曲がっている。

帰還後は、当主が戦死した松田家を継がれ、信用組合関係の仕事を主に勤められて定年退職されたが、几帳面で数字に明るく、世話好きの人柄から、長年全抑

協の松任市支部事務局長を引き受けていただき、現在は、石川県支部の事務局長として、慰霊碑の建立事業その他に多大のご尽力を頂いて、感激している次第である。

(石川県 永井 正三)

## シベリア一六四〇日の重労働

島根県 星野 好夫

出生から入隊まで

私は、大正五年三月十三日、木次町の小作農家の八人兄弟(男六人・女二人)の六男坊として生まれ、高小卒を経て昭和五年四月より故郷の製紙会社に勤めることになった。

当時十五歳であった私は、なんとかして一人立ちするため、若干の勉強をしており、二年が過ぎた。家族は父母、兄、兄嫁、甥一人の六人家族で、中下位の生活であったと思う。

会社勤めの折、次のようなことがあり、これが将来シベリア生活に大きく役立つことを見聞した。

と申すのは、製紙会社は紙を乾かすボイラーがあり、このボイラーには常に高温の蒸気を二十四時間送ることとなっている。そのためボイラー手は常に罐の温度計を見ながら石炭を投入する。その投入方法により温度に高低が生ずる。石炭は薄く広く扇のように平均して投入せねば火力が上がらないことを知った。これがシベリアで役に立とうとは思ってもよらない出会いとなった。

昭和七年六月、私は郵便局に就職をするため広島通信講習所に入所し、一年間主としてモールス符号を習得、八年七月から木次郵便局の受信係(夜九時三十分からは電話交換を兼務)として朝八時から二十四時間勤務となった。入隊するまで、昭和十二年二月いっぱい勤めた。

昭和十一年徴集である私は甲種合格であり、昭和十二年三月新京電信第三連隊に直接入隊、初年兵を終わる二年兵となるや早々、関東軍憲兵教習隊に入隊、訓